

令和2年度 病害虫防除情報

令和2年8月18日
発表：福島県病害虫防除所

- 1 対象作物：飼料用トウモロコシ、スイートコーン
- 2 病害虫：ツマジロクサヨトウ
- 3 対象地域：全域

県南地方でツマジロクサヨトウの寄生を確認しました。
農作物をよく観察し、適切な防除を実施しましょう。

【発生状況等】

- (1) 県南地方の飼料用トウモロコシ栽培ほ場で8/3にツマジロクサヨトウ幼虫の寄生を確認しました。
- (2) 寄生を確認した飼料用トウモロコシ栽培ほ場は、播種時期が遅かったため7月下旬の生育ステージは出穂前で、幼虫は展開前の葉の隙間に潜っていました(写真1, 2)。
- (3) 県内各地に設置しているフェロモントラップでは、福島市で5/20～5/27、郡山市で6/29～7/6と7/27～8/3に、ツマジロクサヨトウ雄成虫が誘殺されています。
- (4) 本種は飛翔能力が高く、アメリカ合衆国では1世代で500 km、1晩で100 km移動することもあると報告されています。本年度、近県では新潟県、山形県、秋田県で幼虫の寄生が確認されています。

【生態等】

- (1) 本種は中南米原産で、国内での加害事例は飼料用トウモロコシ、サトウキビ、ソルガム、スイートコーンですが、海外の事例ではイネ科作物以外にもアブラナ科、ウリ科、ナス科、キク科など、いろいろな作物を加害することが報告されています。通常150～200個程度の卵塊で産卵しますので、作物が小さいと生育に大きな影響を及ぼします。
- (2) 本種は卵から26～39日(温度条件や餌植物の影響を受ける)で成虫となり、発育限界温度は10.9℃で、低温で活動と発達が停止します。平均気温が発育限界温度を上回る時期に被害が発生すると仮定すると、本県では10月末まで警戒が必要です。なお、気温が0℃近くなるとすべてのステージで死滅するため、本県では越冬できません。
- (3) 本種を簡易的に見分けるポイントは、頭部に淡色の「Y字状」紋(写真3)-頭部正面から見た場合は「逆Y字状」、尾部(腹部後方)の刺毛基板が大きく目立ちます(写真4)。

【防除対策】

- (1) 本種の幼虫は、頂芽付近の若い葉や茎、花及び果実等を食害します。これらの部位をよく観察し、食害痕や虫糞が確認された場合は、薬剤防除をください(表1)。なお、飼料用トウモロコシで薬剤散布が難しい場合は、早期刈り取り、収穫・調製、ほ場残渣の速やかなすき込みを検討してください。
- (2) 遅い作型のスイートコーンやこれから定植する野菜類では特に発生に注意し、若い葉などに被害痕が多く見られる場合は、病害虫防除所までご連絡ください。



写真1 被害状況



写真2 老齢幼虫



写真3 ツマジロクサヨトウ幼虫の頭部



写真4 ツマジロクサヨトウ幼虫の尾部(腹部後方)

表1 飼料用とうもろこし

商品名	使用方法	使用時期	散布液量	希釈倍数使用量	本剤の使用回数
トアロー水和剤CT、 サブリナフロアブル	散布	発生初期 但し収穫前日まで	100～300L/10a	1000倍	—
エスマルクDF、フローバックD F、エコマスターBT	散布	発生初期但し、収穫前日まで	100～300L/10a	2000倍	—
パダンSG水溶剤	散布	収穫21日前まで	100～300L/10a	1000倍	2回以内
モスピラン顆粒水溶剤	散布	収穫90日前まで	100～300L/10a	6000倍	3回以内
スミチオン乳剤	散布	収穫30日前まで	100～300L/10a	2000倍	2回以内

※上記農薬はツマジロクサヨトウに対して登録はありませんが、植物防疫法第 29 条第 1 項の規定による防除を行うために使用する農薬として、使用が可能です。

※上記使用方法、使用時期、散布液量、希釈倍数使用量、使用回数を守ることで、出荷停止等、流通に支障が出ることもありません。

※上記の作物以外で使用可能な農薬については、農林水産省HPを参照。

http://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kokunai/attach/pdf/tumajiro-21.pdf

●情報内容への質問や要望は、福島県農業総合センター安全農業推進部発生予察課（病害虫防除所）まで御連絡ください。

TEL 024-958-1709 FAX 024-958-1727